

BOOK REVIEW

はじめよう！おうちでできる 子どものリハビリテーション&やさしいケア —小さく生まれた子どもや重い障がいのある子どもの在宅支援のために—

少子化が問題になっている現代の日本において、体重 2,500 g 未満の低出生体重児の割合は約 10% となり、医療的ケア児は 10 年前に比べ 2 倍の約 2 万人、人工呼吸器を必要とする子どもたちは 10 年前の約 10 倍の約 4,000 人と増加の一途をたどっている。その多くの子どもたちは在宅で生活を送る。だが、その増加に社会は戸惑い、子どもたちと家族を取り巻く環境はあまりにぜい弱である。

本書は、そんな子どもたちと家族に幸せをもたらそうと日々奮闘するフロンティアたちが結集して作り上げた本である。本をひととくと、多くのイラストや写真があり、やさしい文字と色使いが彩を添えている。執筆者も医療・福祉・教育と、多職種連携がなされている。多職種連携は、子どもと家族を支援するだけでなく、新たな社会システムを創っていくうえで欠かせないものであり、そのことも本書は体現している。

内容も多岐にわたる。発達、呼吸、循環、睡眠、摂食、姿勢、装具、社会制度、災害対策などを「はじめよう！おうちでできる子どものリハビリテーション&やさしいケア」の題のごとく、やさしくわかりやすく解説している。この本の「やさしい」には 2 つの意味が込められている。1 つは、子どもにかかわる人にとって、わかりやすく実践しやすい「易しい」である。もう 1 つは子どもにとって、安心、安全、安楽な「優しい」である。

本書では、「在宅リハでは、子どもとかわる“楽しさ”を両親が感じられるように支援していかなければいけない」と説いている。特筆すべきは、第 2 章「小さく生まれた子どものリハビリテーション」である。早産児・低出生体重児について、入院中の

摂食・遊び・ポジショニング・退院支援のポイントをイラストでわかりやすく解説している。そして、次に発達表・おもちゃの発達表・玩具一覧表・コミュニケーションの促進方法などが示されていて、家族が“楽しさ”を感じられる情報が満載である。他の章の、医療・福祉サービス・法律などすべての分野の情報とともに、不安いつぱいの家族を安心感で包み込む。おもちゃの発達表など私は今までみたこともなかった。まさしく、支援者も“楽しさ”を感じられる本である。

本書は、おわりに「小さく生まれた子ども、重い障がいのある子どもの支援者の皆さまへ」というメッセージが込められている。成人しか経験のなかった PT の著者が、初めて小児を担当することになり、療育の PT を見学に行ったときのこと。抱っここの仕方を教わろうとお願いしたとき、「PT だったら触れはどうやって抱っこをするかわかるでしょ？」とにべもなく言われ、そのひとと言が著者の心に火をつけたと書いている。しかし、著者のようにそのひと言を糧にする者はほんの一握りであろう。似たような経験から、小児の在宅を去っていった支援者もいることだろう。

家族も支援者も、誰もが初心者だった。わからないことを教え、教えられ、職種を超え、互いに理解しあい、“楽しい”“やさしい”を広げていく。

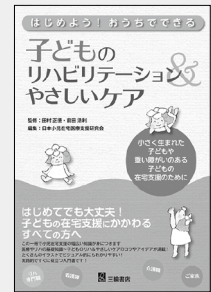
本書は、表紙から裏表紙まで、その思いが貫かれている。

“楽しい”を共有できる本である。

“易しい”を共有できる本である。

“優しい”を共有できる本である。

この本を読まずして、小児在宅は語れない。



●田村正徳, 他＝監
日本小児在宅医療支援研究会＝編
(B5/320 頁/4,800
円＋税/三輪書店/
2019 年)

評者

小沢 浩

島田療育センターはちおうじ、
医師